

鎌田先生&坪倉先生講演会

=放射能から子どもを守る=

子どもの生きる力を育てよう！

今南相馬の本当の姿を語る事の出来る最強のタッグ、ここに完成！



日時 平成24年 11月13日(火) 18:00開場 18:30開演

場所 鹿島区 さくらホール(☎0244-46-5116)

主催 南相馬PTA連絡協議会

共催 つながろう南相馬・南相馬子どものつばさ

後援 南相馬教育委員会

協力 そうだ せんせいにきいてみよう！！実行委員会

講師プロフィール



◎ 鎌田 實 医師

医師・作家。

諏訪中央病院名誉院長

日本チェルノブイリ連帯基金（JCF）理事長

日本・イラク・メディカルネット（JIM-NET）代表

1948年東京生まれ。東京医科歯科大学医学部卒業

長野県茅野市の諏訪中央病院にて、全国に先駆けて「地域医療」を探求・推進した先駆者として名高い。地域の行政、患者とその家族、介護する側・される側、ヘルパーとひたむきに向き合い、それぞれの声を取り入れた「地域医療（＝地域・住民とともに作る医療）」という概念を築きあげた。赴任当時は医師不足、深刻な赤字続きだった病院経営を再建。行政とともに推進した健康活動が功を奏し、同市は「脳卒中が多く医療費が高い地域」から「長寿で医療費が安い地域」へと進化を遂げた。

それらの体験を綴った著書『がんばらない』（集英社）はベストセラーとなり、2001年にはTBSでドラマ化された。その傍らで、チェルノブイリ救援活動（放射能汚染地帯へ医師団派遣等／JCF）イラクへの医療支援（難民キャンプでの診察等／JIM-NET）にも取り組んでおり、2009年にはベスト・ファーザーイエローリボン賞（学術・文化部門）、2011年には日本放送協会放送文化賞を受賞。3.11東日本大震災以降は福島や石巻の支援を持続的に行っている。講演テーマは「“がんばらない” けど“あきらめない” 命を支えるということ」、「心と体の健康法教えます」など。国内外で“命”と“生”と向き合ってきた経験から講話する。

【ベストセラー著書】

『がんばらない』

（集英社）

本当に豊かな生、また死とはなにか。

延命だけではない、患者の側に立った医療を

徹底して目指す鎌田医師が、日々患者や

その家族に接する中で綴った感動のエッセイ。



◎ 坪倉正治先生

東京大学医科学研究所 医師



坪倉先生と筆者、
東京大学にて（2012年8月 アズビー・ブラウン撮影）

私は、3.11の福島原発事故の後、猫の目のように変わる情報や、幾多と流れる情報に右往左往し、基準値がわからずにいました。セーフキャストのボランティアをしていて良かったことには、こうした基準の不明な情報を自分なりにでも判断できる基準をセーフキャストのメンバーやセーフキャストが計測した空間放射線量から教えてもらったことです。今回の事故では、チェルノブイリが頻繁に引き合いに出されます。チェルノブイリの10年後、20年後を見て、今の福島を推測しようというのはよく理解できます。しかし、実はチェルノブイリと福島原発事故の間には大きな違いもたくさんあります。旧ソ連政権の下にあった当時のチェルノブイリや周辺地域では、事故直後には何も知らされず、長らくその土地でできた野菜やその土地で絞った牛乳を飲んでいたといえます。

その点からみると、今回の福島は、インターネットの影響もあり、多くの人が少しでも早く、正確な情報を得ようと機敏に行動し、早い段階で食べ物への汚染を懸念し、汚染度の高い食べ物を避けるように配慮したといえるのではないのでしょうか。これは、チェルノブイリ事故のその後とは異なる事情です。事故後1年経った頃から、今回の人間の健康に関する被害がいかほどのものなのか、その目安が地元の研究者や医療関係者達から少しずつ明らかになってきています。東京大学、医科学研究所の坪倉正治先生は、昨年2011年7月から南相馬市立総合病院で南相馬と近隣住民、郡山の市民病院で、WBC（Whole Body Counter：ホール・ボディ・カウンター）を使って内部被ばく量をこれまで2万件以上計測しています。ちなみに南相馬市は地方自治体として初めてWBCを購入した市です。

鎌田先生&坪倉先生講演会

=放射能から子どもを守る=

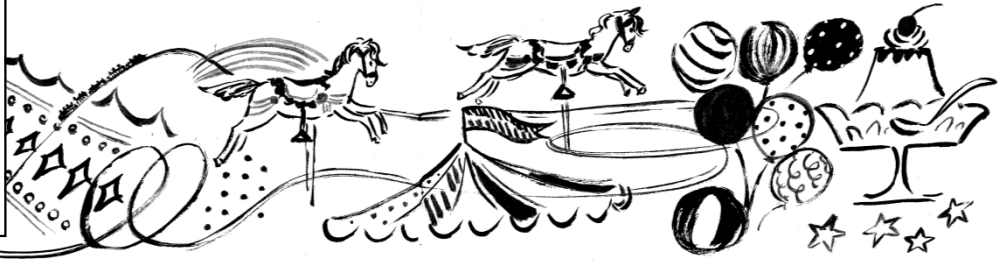
子どもの生きる力を育てよう！

今南相馬の本当の姿を語る事の出来る最強のタッグ、ここに完成！

次 第

- 1 開会の言葉 南相馬小中学校PTA連絡協議会副会長 末 永 徳 明
- 2 実行委員長挨拶 南相馬小中学校PTA連絡協議会会長 西 道 典
- 3 来賓挨拶 南 相 馬 教 育 委 員 会 教 育 長 青 木 紀 男
- 4 講演
 - 1.坪倉正治先生
「南相馬の子どもたちの内部被曝の現状と今後の課題」
 - 2.鎌田實先生
「命・子ども・放射能・絆について考える」
 - 3.質疑応答
- 5 御礼の言葉
- 6 花束贈呈
- 7 閉会の言葉 南相馬小中学校PTA連絡協議会副会長 遠 藤 修 司

—メモ—



子どものまっとうな怒り

宮地尚子

十七歳になった娘と昔の話をしていたら、おもしろい発言があった。小さい頃、自分が怒っているのに、周囲の大人たちから「疲れてるんだね」と流されることが多くて、それがとてもいやだったというのだ。

子どもにだって、怒るときには理由がある。楽しみにしていた約束を守ってもらえなかった、というのがその最たるものだろう。「日曜日に遊園地に連れていってもらう」とか、「嫌いなニンジンを食べたら、その代わりに後でプリンを食べてもいい」とか、そんな約束をしていたはずなのに、前日になって遊園地行きが中止になったり、やっぱりプリンは明日にしようね、と急にルールが変われば、子どもは理不尽さを感じるだろう。

考えてみると、大人はけっこう簡単に子どもとの約束を反古にしている。子どもの望みを安請け合ひして、口約束をして、なのにいざとなると大人の都合を優先する。勝手に予定を変えたり、後回しにしようとする。「後でしてあげるから」「いつか連れていってあげるから」という言葉さえ、その場限りのごまかしかもしれない。

そして子どもが怒り出したら、「わがまま言わないで」「聞き分けが悪いわね」と、子どものせいにする。「機嫌悪くなっちゃったね」「きつとお腹がすいてるんだね」「眠いんだ

16

ね」「疲れているんだね」と、問題を子どもの側にすり替える。たしかに子どもの思考には短絡的などころもあるし、いろんな事情が勘案できず、柔軟性に欠けたり、非現実的であるかもしれない。大人は、さまざまな状況の変化の中、子どもの安全などを考えて、総合的判断を下さなければいけないから、いつも子どもの思いどおりにはできないだろう。

けれども結局のところ、大人は子どものことをなめてかかっていないだろうか。「子どもはすぐ忘れるから」「関心を別のことにはそらせばいい」と思っていないだろうか。子どもの楽しみを、心のどこかで「たかが」と思っていないだろうか。たしかに大人から見れば、遊園地もプリンも、たかが遊び、たかがおやつである。優先順位の低い、ドタキャンOKのものかもしれない。

でも、大人の事情の中にも、「たかが」なことは多いはずである。そして大人も、お腹がすいていたり、眠かったり、疲れていたりすると、「聞き分け」が悪くなり、「わがまま」になり、不機嫌になり、怒り出したりする。大人のやつあたりを一番もろに受けるのは、そばにいる子どもたちかもしれない。ルールを決める権限を持っているからこそ、途中でころころルールを変えない大人、子どもの怒りをきちんと受けとめて、その正当性を考えてみることでできる大人になりたいものである。自分の感情まかせで子どもに接するのではなく、約束を守れないときには、できる限り説明を尽くす大人に。

(みやじなおこ／橋大学大学院教授精神科医)